

# ポイント 短歌の文法

第六回

安田

純生<sup>すみお</sup>

## 「信じず」「か」「信ぜず」「か

現代語に「信じない」という言い方がありません。私の住む大阪あたりでは「信じへん」とも言いますが、話しことばでそう言っている人も、文章では「信じない」と書くのが普通です。この「信じない」が、そのままで文語表現にもなると考える人は、まず、いないでしょう。それでは、「信じない」を文語表現にすれば、どのような形になるのでしょうか。

一見して「ない」が、いかにも現代語風です。とはいえ、これを単純に「なし」に置き換えて「信じなし」という文語の形を想定する人も、たぶん稀でしょう。「神を信じなし」「信じなき人」では、どうも日本語として変な感じがします。しかし、現代語の助動詞「ない」は、文語の助動詞「ず」に対応するのだからと思い、「信じず」という形を想定する人は、けっこう多いのではないのでしょうか。現代語の「信じる」は、終止形ならば「信ず」に、連体形ならば「信ずる」に言い換えなければ文語にならないだろうけれど、「信じず」のような未然形の「信じ」は、そのままでもいいと判断す

る人が少なくないようです。そう判断する人は、「信じよう」「信じられる」も「信じむ」「信じらる」と表現することでしょう。事実、現代の文語体短歌を読んでいますと、「神を信じず」「信じざる人」「信じねど」「来るを信じむ」「信じらるるか」などという言い方がしばしば出てきます。ここには、「信じざる」の例だけを引いておきます。

餌もらふ時よりほかは近寄らず捨てられて人間を信じざる猫は

小川種夫「ダルタニヤン一族」

一方、現代語ならば「信じろ」「信じよ」となる命令形は、現代の文語体短歌でも「信じよ」の形が見られます。意図的に現代語の言い方を混ぜたケースもあるでしょうけれど、文語の命令形は「信じよ」だと考えている作者もいるでしょう。つまり、現代の作者のなかには、

信じ（未然）・信じ（連用）・信ず（終止）・信ずる（連体）・信ずれ（已然）・信じよ（命令）

と活用する文語動詞「信ず」を想定している人が、かなり多いようにも思われるのです。右のような活用は上二段活用と呼びます。アイウエオの五段のうち、上にあるイとウの二段（「信ず」の場合はジとズ）に活用するので上二段活用と名付けられたのです。現代語の「信じる」は上一段活用で、一般的に、現代語の上一段活用の語は文語では上二段活用の語であったのですから、それでよさそうな感じがするのでしょうか。

ところが、中世くらいまでの「信ず」の用例を見ますと、普通、そういう活用を示していません。未然形と命令形の用例に限って次にあげておきましょう。ただし、「信」は漢字の音で「信ず」は大

和言葉ではなく、それゆえに和歌における使用は避けられていた  
たので、平安時代の散文での用例になります。

仏の御法を信ぜん人は疑ふべきにもあらず。

『古本説話集』巻下

いと興あることいふ老者たちかな。さらにこそ信ぜられね。

『大鏡』巻一

年ごろ信ぜずと云へども（中略）必ず極楽に往生すと云ふ事を  
信ぜよ。

『今昔物語集』巻十五

これによって明らかのように、文語の体系のなかでは、「信じん」  
「信じらる」「信じず」「信じよ」ではなく「信ぜん（む）」「信ぜら  
る」「信ぜず」「信ぜよ」となっていました。つまり「信ず」は、も  
ともと、

信ぜ（未然）・信じ（連用）・信ず（終止）・信ずる（連体）・信  
ずれ（已然）・信ぜよ（命令）

と活用するサ変の活用を示していたのです。現代語でも、サ変の  
「信ずる」が用いられないわけではないので、現代語を取録対象に  
した小型の国語辞典でも、上一段の「信じる」とは別にサ変の「信  
ずる」を見出し語に立てるのが一般的です。活用の上で、いまだに  
揺れが残っている語だともいえます。

冒頭にあげました、「信じない」を文語表現にすれば、どうい  
形になるのかという問題にもどりますと、正統的な文語の言い方は  
「信ぜず」でありました。現代短歌から例をあげると、たとえば、  
自らは傷つかずるたき人の言ふまこところといふをわれは信ぜず

石田照子『葦の花』

が、その例になります。そして「信じず」という言い方は、本来の  
文語ではなく、現代語の「信じない」を文語風にいった表現となる  
でしょうか。このような、本来の文語には存在しなかった文語風の  
表現を「文語めかし」と呼ぶことがあります。明治以降の文語体  
には、「文語めかし」の表現が少なからず見受けられます。前回に  
取り上げた「楽しきらし」も、そういったことばの一つでした。た  
だし「文語めかし」も、短歌・俳句という狭い範囲に限られている  
とはいえ、ことばとして存在し、かつ通じている以上、違和感を覚  
えることはあっても、誤りであるとして簡単に切り捨てることは、  
少なくとも私にはできません。

今回は「信じる」を取り上げましたが、「信じる」だけでなく、  
「感じる」「投じる」「演じる」など、漢字の音をあらわす語に「じ  
る」が続いた現代語は、すべて同様で、いずれも文語では、上二段  
でなくサ変に活用していました。仮に古い時代に用例の見出せない  
語であったとしても、同種の語は、サ変に活用するのが文語の体系  
のなかのあり方であったといえるでしょう。ともかくも文語では、  
「感じず」「感じよ」、「投じず」「投じよ」、「演じず」「演じよ」など  
とはせず、「感ぜず」「感ぜよ」、「投ぜず」「投ぜよ」、「演ぜず」「演  
ぜよ」などとしていたのです。

それから、過去回想の助動詞「き」の連体形の「し」が続くとき  
は、「信じし」「感じし」などとなるのではなく、「信ぜし」「感ぜ  
し」などとなりました。「じし」か「ぜし」か、「しし」か「せし」  
かの区別は、わかりにくいものようですが、このことは、いずれ  
また別の機会に述べたいと思います。